

ユ・ソラ

意識されない「糸」の大切さ、もろさを見つめる

—最初に自己紹介と、ふだんの制作の日々について教えてください。

ユ・ソラ（以降「ユ」）：布とミシンを使って、刺繍による平面作品や、彫刻ともインスタレーションとも言える立体作品を制作しています。子どもがいま1歳3か月で、昼は子育て、夜は制作という生活です。韓国出身で、日本には留学で引っ越ししてきました。当時は大学内のスタジオ、知人のアトリエなどを転々としながら制作していました。ただ、妊娠したとわかった時、当分は子どもと離れられないと思い、広さを第1に優先して今の家を探しました。部屋が3つあり、ひとつは皆の寝室、2つ目はパパ（夫）の部屋で、3つ目が私の制作のための部屋です。

当初、私の部屋はどんどん皆の荷物がたまってしまいカオスな状態でしたが、リビングのテーブルなどで刺繍だけは続けてきました。ほぼ2年経った最近やっと片づいて、ミシンを使ったり、床に材料を広げて作業したりするスペースができました。この春から、住んでいる区で子どもの一時預かりをお願いできることになり、もう1秒でももったいないと思い、預かり施設の近くのカフェでずっと刺繍していました。外出先でつくるときは、机の上で刺繍枠を使うためのスタンドを持っています。

今は自宅にも制作のための部屋ができたので、リビングと寝室に子どもの様子を確認できるカメラをつけて、ちゃんと寝ているかな、もうすぐ起きるかな、と見ながら静かにやっています。今後どんどん制作しやすくなるかなと期待していますが、この1年ぐらいは、実感としては10年ぐらいに長く感じました（笑）。

「日常」の大切さに気づいた時期

ユ：私が日本に来たのは、自分が作品で扱う「日常」が、韓国ではうまくいかない感覚があったからでもあります。まず、日常という言葉自体に対する感覚が違います。日本は自然災害なども多いからか、何気ない日常の大切さや、穏やかな日常へのとらえ方が韓国とは結構違うと感じます。韓国で日常というと「日常からの脱出」みたいな、つまり日常はストレスだらけだとか、毎日同じ日常ではつまらな

い、という感覚があるように思います。これは映画やドラマ、CMからも感じることで、日本のドラマは穏やかなものが多いのに比べ、韓国では「目を開けたら突然10年前に戻って人生をやり直す」というような、急展開するお話も多いですね。

そこには環境や経験の違いもあると思います。私が今のような作品をつくる大きなきっかけになったのは、3.11の震災でした。当時、私にとって日本での初展示となった、横浜での日韓合同卒業制作展で来日していました。その日はたまたま、渋谷公園通りギャラリーの場所（当時はトーキョーワンダーサイト渋谷）で展示を観ていたのです。これまで想像したことがない大きな地震を、初めて体験しました。驚いて、揺れが止まるのを待っていると、やがて周りの建物の非常階段から人々が降りてきました。鉄の階段を降りてくる足音がすごく怖かったのを覚えています。

当時は日本語がわからず、でも「じしん」という言葉は韓国語でも発音が似ているため、それだけはわかりました。ただ、あの地震がどれだけ大変なことだったのか当時は詳しく理解できず、何年か経ってやっとわかりました。またそのころ、韓国でも大勢の人々が亡くなる事故があり、そうした出来事以外にも自分の周りの人が亡くなるようなことが続いたのです。急に激しい波がきたというか。

—その後の制作にも関わる出来事だったのですか？

ユ：はい。震災でも事故でも、亡くなった方々やその家族にとっては、もう以前の日常には戻れないということを急に理解し、自分が生きている1分1秒がすごく大切なのだと感じました。それ以前から自分の部屋を描く作品はつくっていて、作品の見た目はあまり変わっていませんが、そこに込めるものは変化して、すごく切実に作品を作るようになりました。

「普通」をめぐる研究

ユ：そこから「普通」について自分なりに研究していくなかで、自分の部屋ばかり描いて、見る側がそれを日常の姿だと思えるだろうかと気づきました。普通の日常って何だろう、ということですね。日本に引っ越した時期とも重なっていたので、今まで生きてきた韓国と、日本の日常とをよく比べて見ていました。例えば賃貸住宅の検索アプリで部屋の間取りをたくさん見てみると、構造が違うから生活が違う

のも当たり前だと思えてきました。

そうして、身の回りで経験した日常から両者の似ているところと違うところを比べ、どちらにも共感できる「普通」の姿はあるのかをずっと研究しました。そこから今のような立体作品が生まれています。そのさい、誰が見ても家の中の日常だと思えるようにしたくて、モチーフには特にお洒落ではない、シンプルな家具などを選びました。

—たしかに「私もこんな風に家電を積んでいるな、レシートをよくクシャクシャにしているな」と感じました。

ユ：ただ、やはり日常の姿というのは国によっても違うと感じます。例えば韓国ではキャッシュレス化が進んで、だいぶ前から紙のレシートは使わなくなりました。また、ドアのロックは指紋認証や暗証番号のタッチパネルが主流で、鍵を見たことのない子どもも多いと思います。そういう流れは、韓国は早いと感じます。

他方、2017年に友だちを訪ねて初めてヨーロッパを訪ねたとき、電車で隣に座ったドイツ在住の韓国人のおじさんと鍵の話をしたら「生活するだけでこんなに鍵があるよ」と、7個ぐらいついている鍵束を見せてくれて。ロンドンでも腰に鍵をたくさんつけた人が世代を問わず結構いました。ですから、もしまた違う国に住むことになったら、違う日常を描くのかもしれないなと思います。

—お話を伺っていると、いろんな視点の日常を見たくなります。ひとことで日常と言っても、広がりがありそうですね。

ユ：そうですね。だからこそ、どこで暮らす人にとっても、私の作品から日常が伝わってくるものにしたいと、常に考えながら取り組んでいます。私のインスタグラムでレシートの作品を見たアメリカの人からダイレクトメールがくるなど、海外から作品について反応がくることはあります。そういうふうに、できるだけ共感してもらえる作品をつくりたいと思っています。

布と糸、かたちという

—今回、展示空間に吊るした大きな平面作品は、白い布に白い糸で描いていますね。一方、立体作品では、白い布で覆われた生活用品の輪郭が黒い糸で縁取られています。

ユ：最初に糸を使い始めたときは、ノートにボールペンで描いた小さなドローイングを拡大コピーし、ミシンで布に写すということをしていました。大学では繊維美術・ファッションデザイン専攻で、色々な素材を使って表現する課題に取り組むなかで出てきた発想です。パッと見ると白い紙かキャンバスに黒いボールペンで描いたように見えるけれど、よく見ると刺繍でできていると気づく。そうして、布に少し綿を入れ、自分の顔などを描いていました。入学後、学内のあちこちに彫刻科の作品が展示される催しを見て、立体作品も作ってみたい気持ちがあったのです。でも課題の提出期限が迫り、ぬいぐるみのように立体の面を作っていく時間はなかった。そこで、ミシンでパーっと縫って、布に少し綿を入れ、描いた顔の鼻の部分などは綿を多めにして作ったのが始まりですね。

そうした作品を10年ぐらい作り、黒以外の糸も使ったり、布に絵の具で色を塗ったり、詰めものを綿以外の素材にしたりと、色々試しました。ただ、頭の中では作りたい立体が決まっていたものの、布と綿という発想からは限界があるとも感じました。そこで、一旦その夢は置いて平面作品に取り組むなかで、白い糸を使ってみたときに気づきがありました。白い素材に白い糸で刺繍すると、何を描いているのかははっきり見えない。でも人って、それを見つけようとするのですね。だから見る人それぞれで、自分の知っているものだけが見えてくるのも面白くて。また、光によって印象が変わり、何も見えなくなったり、形が浮き上がってきたりするのは、白い糸の作品の面白いところだと思います。

結局、大学では複数専攻の制度を利用して彫刻科にも入り、布で立体を作ることに取り組みました。卒業後、6、7年は韓日を往復しながら作品を発表しました。その時期、日本での展示で「ボールペンのような小さいモノを立体で作ったら面白いのでは」と言ってくれた人がいて。小さなモノに綿が入るとぬいぐるみになってしまうから、綿なしでやってみたら、すごくいいな、これが私の作りたかったものかなと思えました。白と黒の組み合わせは平面作品と同じく、より多くの人が自分の日常の姿を重ねられる作品にしたいからです。ただ、色なしでも「現代女性の日常」と評してくれた方もいて、色だけじゃないとも気づかされました。

今のような立体をつくるようになって、作品にほつれたような糸が残り、絡まるのも面白いと考えるようになりました。鉛筆でデッサンをすると、最終的には消す線がいっぱいありますよね。ミシンで作ると自然に糸が残るので、一部をそのままにしたり、場合によっては何を描いているかわからないほど残したりもします。立体作品のほうは、家具や細々した日常品を全て形からつくって、そこに布を張り、最後に糸を貼るのですが、平面作品よりも糸を残しています。見る人によってはそれが未完成に見えたり、不安定に見えたり、色々な意見があります。

こうした作品の間を歩いてもらい、「あ、これ知ってる」「この本、持ってる」と面白いところを見つけながら、日常を見直すことができたという思いでつくっています。時間を切り取って誰かの部屋を再現したような作品ですが、近づいた時に糸が揺れると、そこに空気や時間が流れていることも感じられる。時計の作品だけは実際に針が動くようにしているのも、そういう気持ちからです。そして、洋服から飛び出した糸を引っ張るとどんどんほつれてしまうように、もし作品の黒い糸を引っ張る、踏むなど、間違えてちょっとした力が加わると、その輪郭はすべて消えて真っ白になるかもしれない。それは、日常のもろさや、もろいからこそその大切さなど、私が表現したかったことにつながっていると思います。

さわれる作品

—今回は初めて、さわれる作品も作っていただきました。

ユ：竹野さんとアイデアを出し合い、実際に押せる電気スイッチや、開けられる引き出し、箱入りティッシュペーパーなどをつくりました。従来は家具なども軽くて薄い素材で作っていました。私にとって、1人で作って1人で運べることは大事な点で、それは自分が日本という海外に来ているからというものもあります。でも今回、さわれる作品には本物を使いました。改めて感じたのは、本物って重いのだなということ。重くて、ぶつかるとすごく痛いなと思いながらつくりました。

日常を通じて身についた感覚、たとえばスイッチを押すとそこでカチャッとなるのはごく当たり前だからこそ、ちゃんと再現したいと思い、壁に穴を開けて本物を設置しています。本当はどこかの電気が点くようなことまでやりたかったですね。で

も一緒に展示している飯川雄大さんの作品のような仕掛けもあるから、「どこかで何かが点いているのかな」と思われているかもしれません。

—そうして鑑賞者に想像してもらえることも、この展覧会のテーマのひとつです。

ユ：私の作品を見たとき、その質感が気になる方もいると思いますが、日常生活にあるモノをモチーフにした作品に対して、日常と同じ使い方・触り方をしたら面白いかなと考えました。ただ、私のそうした意図とは別に、皆さんティッシュ箱のティッシュペーパーを優しく撫でてくださったり、箱を持ち上げて中のティッシュがポロっと出てしまったりしたのも印象的です。もしまたこういう機会があったら、今回の経験も参考に、より面白いのを作りたいです。

今日は、泣いてしまいそうな話も少ししましたが、私が目指しているのは面白さです。「面白い」から「もっと見たい」となり、そこから自分の日常を振り返ることにつながるのかな、と展示を重ねるなかで感じています。展覧会場で初めて出会った人と、洗濯バサミや、靴下の畳み方について話し込んだこともあります。そこから家族で、カップルで、お互いの話を共有したり、ふだん気にしていなかったことを気にし始めたりする、小さなきっかけにつながるとよいなと思っています。